福島県相馬市 宿泊業の試み

――松川浦観光の昔と今と今後

3

松川浦観光旅館組合　組合長（丸三旅館）　管野 正三
松川浦観光旅館組合（旅館いさみや）　管野 尚
松川浦ガイドの会　会長（ホテルみなとや）　管野 貴拓
松川浦ガイドの会　事務局（亀屋旅館）　久田 浩之

震災前の松川浦観光

管野（正） 松川浦は砂洲に囲まれた細長い入り江で、浦の中に松の生えた大小の島がいくつもあり、「小松島」と呼ばれていました。江戸時代末期はそれらの島に塩田があり、塩を作っていましたが、その後に海苔の養殖が始まり、小さい島をどんどん削って養殖場を広げていきました。

観光業が本格的に始まったのは、約60年前です。浦の干潟で潮干狩りが始まり、風光明媚な景色もあって、観光客がたくさん来るようになりました。当時の旅館や民宿は漁業との兼業が多く、夏は民宿で観光客を受け入れ、冬は海苔などの海産物で生計を立てていたところがほとんどでした。

丸三旅館
管野 正三（かんの しょうぞう）
1961年生まれ。松川浦観光旅館組合の組合長として地域の旅館経営者の取組を牽引。松川浦の歴史や地理にも詳しく、自らもガイド活動。

管野（尚） うちも旅館をやる前は海の仕事をやっていて、曳船業やあさりや海苔をとっていました。そして、農家もやるなど何でも屋でした。潮干狩りの日帰り客を大広間に入れて、みそ汁を食べさせたことをきっかけに宿泊にも力を入れるようになりました。

旅館いさみや
管野 尚（かんの たかし）
1951年生まれ。若手経営者の活動に対して年長者としてアドバイス。松川浦の漁業や干潟の生き物にも詳しく、自らもガイド活動。

管野（貴） うちは旅館専業で、父が仲買の権利を持っていたので、魚を市場で直接買って仕込んで出していました。お客さんは山形・宮城・栃木といった近県からがほとんどです。おいしい魚を安く食べたいという方が来ていました。

管野（正） 管野（貴）さんのような専業旅館と、管野（尚）さんのような兼業旅館や民宿と二分化されていたんです。今、松川浦観光旅館組合には22軒加盟していますが潮干狩りがピークの1980年代、一番多い時には40軒以上ありました。当時、松川浦に面した旅館街は春の潮干狩りの季節になると、みんな軒先にお休み処を作り、魚やイカなどを浜焼きでお客さんに出して、すごく賑わいました。

大きな分岐点になったのは、1994年（平成6年）に相馬市に新地火力発電所ができたことです。火力発電所関連のビジネス客や作業員で旅館や民宿が一気に潤って、松

川浦はまさにバブルでした。

管野（尚） その少し前に海苔の値段が暴落したんです。漁業では食っていけないと思い、ちょうど火力発電所ができてお客が増えたので、旅館業に頭を切り替えました。それからは、平日は火力発電所関係のビジネス客、土日は観光客という形で受け入れてきました。

久田 うちももともとは半分漁業、半分旅館でしたが、海苔の値段が暴落した時に旅館業に完全にシフトし、火力発電所関連のビジネス客と観光客を両方受け入れるようになりました。

管野（正） それまではせいぜい長くても2～3泊だったのに、火力発電所のビジネス客は1～2週間、1カ月もいるわけです。長期滞在も受け入れられるようになり、ビジネス客を泊める宿と、観光客だけの宿というすみ分けが生まれました。

観光的に見ると相馬市にとって一番ウエートが大きい市場は宮城県です。宮城県では「旨い魚を食べるなら松川浦」という知名度が高く、仙台空港周辺の大きい企業は忘・新年会を松川浦でやっていましたし、近隣の農村部からも農閑期の会合や慰労会などでよく来ていました。しかし不景気を迎え、そういう会合が毎年右肩下がりとなり、これ以上下がったらどうなるかという状況だったところに、東日本大震災が起きました。

ホテルみなとや
管野 貴拓（かんの たかひろ）
1976年生まれ。松川浦ガイドの会の会長として活動を推進。旅館や飲食店の若手経営者のまとめ役としても奮闘中。会計事務所勤務を経て、震災以前に父が経営する旅館業に転身。

震災直後～営業再開まで

久田 うちは建物が少し高い場所にあったので、震災の時は奇跡的に床下浸水だけで済みました。2週間ほど山形に避難して帰ってきて、4月中旬くらいから片付け始めました。固定電話がまだ使えませんでしたが、たまたま携帯電話に転送をかけたままだったので、突然携帯に電話がかかってきたんです。相馬市から依頼を受けた仮設住宅の建築業者からで「40人くらいで早急に、そちらに泊まれないか」と。

まだ、ライフラインが復旧しておらず、水も出ないし、電気もガスもない。お風呂にも入れない。それでもいいから泊まりたいと。多分、宿泊施設リストを見て片っ端から電話かけていって、たまたま電話が通じたのがうちだったんだと思います。

それで泊めたんですが、冷蔵庫のものは腐っているし、当然出せる料理もないんです。灯油はあったので、石油ストーブでお湯を沸かして救援物資のカップラーメンを出し、トイレは風呂場の水を汲んで流しました。

亀屋旅館
久田 浩之（ひさた ひろゆき）
1982年生まれ。松川浦ガイドの会の事務局として活動の広報や庶務を担当。震災後に一度介護関連の職に就くも、家業の旅館を手伝うため地元に戻る。

その人たちはかなり長期で滞在しました。

管野（尚） うちも別の町に避難したけど、3月下旬に戻ってきました。もともと大工だから自分で直し始めました。全部自分でやろうと思い1カ月ほど家族で頑張ったけど、全然駄目でした。その後にボランティアが入ってくれて、1階に入り込んでいた泥や残材を全部さらってもらい、6月には復旧できました。

最初はとりあえず建物を直すだけで、しばらく休んでから営業再開しようと思っていたけど、すぐ作業関係の人から予約が入ってきたんです。「車の中で寝ているが足を伸ばしたい。素泊まりでいいから」ということで。客室は全然問題なかったんですが、シャワーが動かなかった。何とか水が出るようにして、最初は2～3人から受け入れました。

管野（正） 原発が止まって火力発電所を動かさなきゃいけないということになり、復旧作業の人たちが一気にたくさん来たんです。泊まる場所がないということで、泊まれる宿からどんどん埋まっていきました。

管野（貴） うちは2011年（平成23年）の10月に駄目でもともと、と

いう気持ちで借金して営業を再開しました。最初に泊まったのは、やはり火力発電所を直しに来たお客さんです。それから2年ほどは、盆正月くらいしか帰らない長期滞在の作業関係のお客さんが泊まっていました。

管野（正） うちは2012年（平成24年）1月に再開しました。工事関係のお客さんは松川浦にとって、一つの足掛かりにはなったんじゃないでしょうか。松川浦では、震災でやめた旅館は5軒です。後継者がいなくてやめるつもりだったのに、復旧工事のお客さんが来たのでやめずに残った民宿もあります。

管野（尚） 震災の後、観光はもう終わりだと思いましたね。旅館もみんなやめるつもりだったと思います。

管野（貴） 最初は作業関係のお客さんに「ずっといてくれ」という気持ちでした。原発の問題もあって、観光のお客さんを呼ぼうという気持ちも全然なくて。2年くらいはそんな感じでしたね。

久田 うちは早い時期から作業関係のお客さんを入れていましたが、早い段階でいなくなるだろうと思っていました。とにかく何か稼がないといけないと思い、旅館は親にまかせて、自分は介護関係の仕事に就職したんです。2011年4月～7月までそこで働いていたんですが、旅館のお客さんがいなくなるどころか増えてきて、親から「忙しくて体がもたないから帰ってこい」と言われてその仕事を辞めて戻り、今に至ります。

復興の補助金申請で地域が一つに

管野（正） やがて復興のため、各方面からいろいろな支援や団体が松川浦に入ってきました。我々はそれまで何も手につかない状態でしたが、そういうお話をいただいて、何かしないと駄目だと思うようになり、できることから一つずつ進めていきました。とにかく、来たものを受けて何かをするという状態でした。しかし、そういうことを体験することで、ファイトが湧きますよね。環境省の復興エコツーリズム推進モデル事業の対象地域にも選定していただき、エコツアーを企画したりしました。小さなともしびのような希望ですが、こういうことをきっかけに観光のお客さんが来るかもしれないという気にはなりました。

本格的に「火がついた」と感じたのは、2011年の8月に持ち上がった復興の補助金制度の話です。建物を直すのに4分の3の補助が出るのですが、一軒一軒では申請できず、地域性を持ったグループでの申請が条件でした。

管野（貴） 申請の締め切りまで2～3週間しかなかったんです。旅館組合などの既存の団体では駄目で、この松川浦というエリアで旅館も飲食店も土産物屋も一緒に頑張ろうというグループを新たに作ることが条件でした。

管野（正） 旅館組合を核として希望者を募り、「松川浦観光振興グループ」を立ち上げました。参加したのは旅館18軒、飲食店・土産物屋9軒の合計27軒です。若手の人たちがパソコンで調べたり、県庁に話を聞きに行ったりと、頑張ってくれたおかげで、1回で審査に通りました。みんな借金があって家が流されて、二重債務を抱えていますから、この補助金はすごくありがたかったです。

管野（尚） あの補助金があったから、今があると思います。でないと、松川浦の旅館は今の半分も残っていないと思う。後継者もおらず、建物が古いところは泣き寝入りで終わったと思いますよ。

管野（貴） その補助金が出るなら、片付けてやり直すという旅館や土産物屋、飲食店が結構あったんです。

管野（正） あれが本当の復興の出発でしたね。「がんばろう」という気持ちに拍車が掛かりました。

震災で失った季節感

管野（正） 松川浦は毎年4月1日が潮干狩りの解禁日です。子どもの頃は潮干狩りが始まると「春が来たんだな」と感じ、土用波が立つと「夏もそろそろ終わりだな」と感じていました。浦で海苔の作業が始まると、ああ秋になったんだなと、子どもながらに季節感をそういう形で感じていました。

震災から5年経とうとしていますが、私は四季の感覚がまるっきりなくなりました。60年前にできたそういう四季のサイクルが、震災で全てゼロになったんです。だから桜が咲こうが、夏にかんかん照りになろうが、四季の感覚はないですね。

管野（貴） 私は旅館に来るお客さんで、四季を感じていました。「海水浴

のお客さんが来れば夏が来たな」「農閑期の団体旅行とか老人クラブが来たらああ秋だな」「ズワイガニがとれる頃になると、冬の忙しい時期が来た」、という感じで。

今は月曜に来て金曜に帰る作業関係のお客さんがほとんどなので、土日以外は「今日は何曜日だっけ」みたいな感覚です。

スポーツツーリズムを観光の新たな柱に

管野（正） それでも落ち着いてくると、改めてここの観光業は何が柱になるのかと考えるようになりました。今までは、地元の魚介類が売りだったけど放射能問題で駄目、シンボルの松は津波をかぶって枯れてしまい風景も駄目という中で、違う形でお客を呼ばないといけない。相馬市は、これからはスポーツツーリズムに力を入れることにし、サッカー場やソフトボール場を整備して合宿客などを受け入れようという話が出たのが2013年（平成25年）頃です。

管野（貴） スポーツツーリズムは今、外部からお客さんを呼ぶ柱ですね。施設使用料をかなり安く設定しています。関東圏でも営業していますが、県内や東北からの利用が多いです。

管野（正） でも、学生相手だから週末に限られるんです。ウイークデーをどうするかをこれから考えないといけない。春、夏、冬休みに大学生の合宿客も入れたいと思っています。

管野（貴） ただ今は作業員で宿はどこもいっぱいで、セールスを一生懸命しても泊まるところがないんです。あとは、今までに比べて客単価が安いことですね。

魚については、相馬双葉漁協で海域や魚種を限定し、国の定めた基準値よりさらに厳しい自主基準を設定して2012年から試験操業を始めました。少しずつとれる魚種は増え、今は70種くらいになっていますが、とれる量が少なく我々が使えるのは10種類もありません。

大きなハードルは2つあって、まず漁業の本操業ができるのか。本操業が始まったとしても、買ってくれて値がつくのか。その2つがクリアにならないと、お客さんを呼ぶ材料にはできません。我々が魚でメシが食えるようになるのはいつになるか、本当に分からないという気持ちはあります。

必要なのは細く長い支援

管野（正） 今、国や県や市が、一般観光客向けに旅行費用を半額補助するクーポンを出していますよね。奥尻島も阪神・淡路も、災害後の5年間は国の補助がたくさん出て、市や町全てが潤ったけど、終わるとみんな干上がって、観光地は閑古鳥が鳴く状態になったと聞いています。今までそういう事例があるなら、お金をストックしておき、そうした支援は本当にお客さんがいなくなった時まで取っておいてほしいと思います。

同じ福島県の中でも状況がそれぞれ違います。中通りや会津地方は風評被害でお客さんが来ないので、この2地域はまさに今、補助金を使ってもお客さんを呼びたいだろうと思います。

我々の場合は復興工事のお客さんがいるので、今はそんなに困っていないけど、そういうお客さんはいついなくなるか分からない。明日から突然みんな引き上げる可能性もあるわけです。全くお客さんがいなくなった時こそ、どうしたら人がこの地域に来るようになるかを考えて支援してもらえたほうがありがたいですね。

管野（貴） 細くてもいいから長い支援が必要です。被災地といっても全部同じではなくて、特に福島県は地域によって事情が違うので、いろんな支援の仕方があってもいいと思います。

今の松川浦の宿は皆、稼働率100％に近く、兼業旅館は前より売り上げが増えていますが、旅館一本でやってきたところは客単価が下がり、震災前の売り上げには届いていません。今は補助金で維持している感じですが、それが終わったらどうなるのか心配です。

管野（尚） 我々の復興は、作業で泊まっている人たちがいなくなった後からですからね。

震災前の状態に戻すことが「復興」か

管野（正） 復興は震災前の状態に戻すことだとよく言われますが、単に元に戻すのではなく、50年、100年先を見てやってほしい。防災ももちろん大事ですが、松川浦は道路から海が見える景観をつくるなど、観光地としてのまちのつくり方があるだろうと思います。

管野（貴）「松川浦観光振興グループ」で、観光地としてこういうふうに復興工事をしてほしいという青写真を行政に提案したんです。文章より、絵にしたほうが分かりやすいだろうということで、イラストレーターに我々がお金を払って描いてもらいました。

管野（正）でも、行政にはなかなか響きませんでしたね。次世代を担う若い人たちの発想が必要だと思うのに、会議も年齢の高い「有識者」の発言が優先されがちです。

久田いろいろな会議があって若手は若手なりにいくつか参加していますが、一人ひとりに意見を聞いたきりになることが多いです。自分はサーフィンやスポーツをいろいろやっていて、その経験から、サーフィンの集客力についてを話すのですが、なかなか伝わりません。

管野（貴）震災で浦と外海を隔てた堤防が一部壊れたことで、新しい砂がたくさん入り、浦の中でアサリの稚貝がすごく増えたんです。堤防の修理が必要なのは分かるけど、水門をつけて海水が交流するようにしてはどうかと提案しました。

管野（正）震災前は、ここの港の魚の水揚げ高と松川浦に来る観光客が落とす金額を比較すると、漁獲高のほうが数段上回っていたんです。砂が浦に入ると船が座礁するから、入らないように堤防をどんどん延ばしていったんですね。

外海から浦に砂が入ってきていた時は魚介類も多かったんですが、今は海水が循環しづらくなり、浦の底の様子も変わってきています。漁業が前と同じくらい復活するか分からないことも考えると、復興の過程で生態系にも配慮した工事をしてくれれば、自然環境と観光の両面でメリットがあるのではと思いますね。

今後に向けて

管野（正）松川浦環境公園が「みちのく潮風トレイル」（**特集5参照**）の起点になったのは、観光の一つの目玉だと思います。生かすも殺すも今後次第ですが、活用していかないといけないと思います。

管野（貴）みちのく潮風トレイルについては会議が開かれたり、看板を立てたりと、地元の中に動きが出てきています。福島県でルートに入っている市町村は相馬市と新地町だけなので、自治体を超えて協力しようという話も出ています。

久田今後、復興工事などのお客さんは必ずいなくなり、その後は自分たちで集客していかないといけない。スポーツツーリズム、エコツーリズム、みちのく潮風トレイルなど、ある素材を全部使って、組み合わせて集客していく必要があると思います。

管野（尚）今のところは作業員の人たちで売り上げが確保されているけど、松川浦の観光については今、ずっと冬眠しているような状態ですよね。作業員がいなくなった時がゼロからの始まりです。ここは食と自然で売ってきたところです。自然はある程度壊れても復旧できるけど、やはり食で頑張っていかないと。それには旅館だけでなく、商店街にも頑張ってもらって、漁業が復活して売れるものができた時に、商店街でお客さんが物を買ってくれるようにしないといけない。

管野（貴）不安はありますがいいこともあって、環境省の事業で始めたエコツーリズムなどは、「旨い魚を食べさせていれば人が来る」という今までの考えをひっくり返してくれました。これがよかった。うちの旅館は船を持ってないのですが、モニターツアーの時、この年で初めて海に出て知った魅力もありました。そういう経験を通して宿屋のおやじとしてのスキルが上がりました。お客さんの楽しませ方は前よりも自信があります。

今までは我々旅館だけで「観光地を何とかしなきゃ」と思っていましたが、震災後は自分が住んでいる所を何とかしなきゃという考えがある人とつながる機会も増えました。今まで漁師さんとのつながりもなく、ただ魚を買うだけでしたが、魚の旨さをどう伝えるかを考えるきっかけにもなりました。おいしい野菜や卵を作っている人など、横のつながりが増えてきて、いろいろなところで頑張っている人に会いやすくなったと思います。

管野（正）これからは旅館組合や商店街だけでなく、地元を好きな人、相馬や松川浦を何とかしたい人で力を合わせて頑張っていけば、今までとは違う売り方もできると思います。光が見えてきているような気がします。

聞き手：観光地域研究部　寺崎竜雄
　　菅野正洋
取材協力：井上理江

自然と文化と人のふれあい

NPO法人松川浦ふれあいサポート　事務局長　佐藤　邦房

福島県相馬市松川浦環境公園の指定管理者として、周辺の環境保全と環境教育の活動を柱にしています。2012年度（平成24年度）から、松川浦環境公園の近くにある大森山をフィールドとして「山学校」を開催しています。これは主に市内の小中学生の親子約20組を対象として、自然の中で木登りや木の葉の種類当て、ターザンごっこなどの遊びを行うものです。

また2015年度（平成27年度）には松川浦の干潟観察会や植物探索会も開催しました。こちらも主に市内から数十人の親子に参加いただきました。

東日本大震災以後、家族のあり方や親子の関係が変わってきています。また、親御さんの側に地場の食材を食べなくなったり、外で子どもを遊ばせなくなったりといった姿が見られます。そういった現状を見直してもらうため、実施している活動は全て親子での参加を前提としています。

浦の魅力を伝える

松川浦の干潟観察会では、環境省の復興エコツーリズム推進モデル事業でガイドとしての研鑽（けんさん）を積んだ旅館経営者の皆さん（管野尚さん、管野貴拓さん、久田浩之さん）に講師を依頼しました。4年間にわたり能力向上に努めてきたので、その成果を生かして産業として根づかせてほしいと考えています。そのため、今回の依頼にあたってもプロのガイドとして依頼し、日当も支払いました。管野尚さんは2週間も前から準備をしてくれて、参加者にも喜ばれていたと思います。また、観察会の1週間前には、干潟の底生生物の生態が専門の東北大学の鈴木孝男先生をお招きして講演会を開催し、研究者から学ぶ場も提供しています。

旅館の皆さんにもガイドとして自信がついてきているように感じます。その意味では大変感謝しています。この観察会は来年度以降も継続したいと考えています。

また、宿泊付きで実施できるかも検討したいです。現在松川浦の旅館は工事関係者の受入が主ですが、一般の観光客も泊まれるようになってほしいと思います。そのためのきっかけとなればよいと考えています。

2015年度の植物探索会は1回だけの開催でしたが、松川浦には四季それぞれの花が咲きます。また松川浦の自然が津波でどのような影響を受けたのかといった点を捉え直す内容にしたいとも考えているので、年間3回程度は開催できるとよいと考えています。

NPOとしての活動も今後は旅館などの観光産業と積極的に連携を図っていきたいですし、その際には、市内だけでなく、広域で考える必要があると思います。

また、整備が進んでいるみちのく潮風トレイルとも連携していけると考えています。3月末にトレイル整備に関係する事業の一環としてウォーキングイベントが開催されました。もちろん私たちも協力しましたし、松川浦の旅館の皆さんにも協力してもらいました。

歴史や文化とともに

松川浦などの貴重な自然と同時に、相馬市には野馬追（のまおい）など歴史や文化に関する資源も数多くあります。自分でも野馬追の騎馬武者の衣装に欠かせない「わらじ」作りの活動にも関わっているので、今後はそういった魅力も打ち出していきたいと思います。

エコツアーは自然を守りながら学ぶ機会を提供する手段としてはとても優れていると考えています。ただ、旅館の皆さんだけの取り組みだと、どうしても商売としてやっているというイメージが前面に出やすく、公的な支援も受けにくいと思います。その点、当団体のような公的な役割を帯びた団体が関わることで、社会性もアピールできるのではないでしょうか。その意味でも今後も連携を図っていきたいと思います。（談）

（さとう　くにふさ）

聞き手：観光地域研究部　菅野正洋

漁業と観光復興

相馬双葉漁業協同組合　青壮年部　部長
沖合底曳網漁船　清昭丸　船主
菊地　基文

震災前、福島県・相馬の沖合底曳網漁は、漁獲量もあり魚種も豊富で、市場から高い評価を受けていた。相馬の漁師には20代から40代の若手・中堅も多く、後継者に恵まれている。自分は、家業の底曳網漁を引き継ぎ約20年、相馬の海とともに生きてきた。

地震発生時、自分は港近くで荷積みの作業中だったが、突然の強い揺れに大津波が来ると直感し、近くにいた母ちゃんと姪っ子、社員を連れて高台に避難し、身を寄せた親戚宅で被災の現状を知った。しばらくは、船のことも、会社のことも、何も考えられなかった。近所の人、お世話になった人、その生死が分からなかった。一方で、その晩、家族に新しい命が誕生。あったまグッチャグチャ、ともかく目の前の命のことだけを考えた。翌日、福島第一原発が爆発。家族を遠方の親戚に預け、家族と相馬を行き来する日々が続いた。

漁業は基幹産業、魚は血液

２０１２年（平成24年）６月の試験操業開始までの間は、いろいろと勉強もした。同年10月には、まず自然エネルギーの地域への普及などを行う「ＮＰＯ法人そうまグリーンアーク」を設立。「原発反対」と叫ぶだけでなく、自分たちには何ができるかを考えた。活動資金も自分たちで稼ぐと決めた。そのために、仲買人の仲間と試行錯誤して作り上げたのが、「どんこ肝つみれ」だった。

震災前、どんこは毎晩食卓に上がるポピュラーな魚だった。水揚げできない現実に、食文化が失われていく、他港から仕入れても、相馬の食文化を守りたいと思った。どんこ肝つみれを手掛けた背景には、本操業を迎えてもかつての魚価で取引できるのかとの不安もあった。鮮魚・活魚でやってきた相馬の漁業も、これからは水産加工に目を向けていく必要性を感じていた。二束三文のどんこが、加工品となり価値が上がった。豊富な魚種が相馬の強み、勝負できる素材はたくさんある。

相馬の基幹産業は漁業。仲買人は魚を中央市場で売り、観光業者は旬の魚で客を呼び込み、生計を立てていた。相馬にとって魚は血液、魚が回らないと地域経済が成り立たない。

どこよりも「そうま」がやるべきじゃないか

『そうま食べる通信』創刊のきっかけは、自分が『東北食べる通信』（２０１３年９月号）に生産者として掲載されたこと。「生産者と消費者の絆を取り戻し、よりよい未来を築く」との考え方に触れ、相馬でもやりたいとずっと思っていた。

２０１４年（平成26年）11月、共感して集まった仲間の一人が発した、「どこよりも『そうま』がやるべきじゃないか」との一言が、創刊を決定づけた。

『そうま食べる通信』では、農業や漁業など生産者の生き方や食に対する想いを取材した「特集記事」と付録として「食材」を消費者（購読者）に届けている。生産者と消費者をつなぐ新しいコミュニティを創っていきたい。ＳＮＳでやりとりしたり、消費者が生産現場を訪ねたり、生産者が都内の収穫祭に出店したり、行ったり来たりの親戚のような付き合いを大事にしている。

福島県産の食べ物には、人それぞれの判断があっていい。ただ、俺たちは、食べ物を育て収穫する現場を見て、感じて、判断してもらいたいと思っている。

人とのつながりを楽しむ観光を

風景を見たり、おいしいものを食べたりするだけじゃなく、観光でも人とのつながりを楽しんでもらいたい。「あの人に会いたい。遊びに行きたい」、そんな観光があってもいい。

これまで、漁業者と観光業者との接点は魚の取引くらいだったが、震災後は、管野貴拓君（ホテルみなとや）らと、相馬で楽しむ体験の企画を考える機会も増えてきた。貴拓君とは考え方が近い。腐れ縁かな、飲む回数が多くなっている（笑）。

震災はターニングポイント

震災で失ったものも多いが、四の五の言っても仕方ない。これまでできなかったことにチャレンジできる、震災はターニングポイントだった。

やりたいことは、まだまだたくさんある。危険と隣り合わせ、仮眠しかできない船の上よりは、何をするにしても楽だと思っているから。（談）

（きくち　もとふみ）

聞き手：観光地域研究部　吉澤清良